



研究の概要

研究の背景

社会や技術の変化が速く進む中で、子どもたちには、答えを素早く見つける力だけでなく、状況に合わせて学び方を見直し、他者と協働しながらよりよい答えを創り出す力が求められている。次期学習指導要領に向けた議論でも、「主体的・対話的で深い学び」を確かなものにするに加え、多様な子どもたちを包摂する柔軟性と、教育の質を高め続けるための実現可能性が重視されている。また、1人1台端末を前提としたデジタル学習基盤のもとで、情報活用能力を高め、学びの質を上げる学習環境の整備が進められている。こうした状況を踏まえ、本校は文部科学省研究開発学校として、40分授業午前5時間制の中で、子どもが学びの主語となる授業を通して自律した学び手の育成を目指していく。

研究のあゆみ

本校では、令和元年度からの5年間の文部科学省研究開発学校の指定とともに、令和4年度から2年間、目黒区教育委員会教育開発指定校を受け、子どもが学び方を学ぶための方策として問題解決の過程に一人1台の学習用情報端末を活用することから実践が始まった。令和5年度は、ICTを活用した複線型の授業について実践を重ね、子どもが主語となる授業の一端を研究成果として発表するに至っている。

令和6年度から3年間、文部科学省研究開発学校の延長指定を受け、引き続き、子ども一人ひとりが主語となる授業、複線型の授業を中心に実践研究を継続している。

研究主題設定の理由

学びの中で「何を、どのように進めるか」を自分で考え、学びを続けていける力は、これからの時代では必要不可欠である。授業では、子どもが受け身で学ぶのではなく、学びに見通しをもち、対話を通じて思考を深め、学びを進めていくことが求められる。本校は、子どもが学びの主語となる学習の在り方を探ることで、主体的に学び続ける力の育成を目指し、本研究に取り組む。

本校の子どもたちは、基礎的な学力は概ね定着している一方、学習の見通しを立てたり、自分の課題を言葉にしたりすることに課題が残る。学びを調整しながら学びを深める姿を、より確かなものにしていく必要がある。

そこで本研究では、40分授業午前5時間制という限られた授業時間の中でも、学びの質を高め、子どもが将来にわたって学び続けられる「持続可能な学び」の実現を目指し、研究主題を設定した。短い時間であっても深い学びを成立させるには、子ども自身が学習を進める手がかりをもち、学びの進み方を自分で整えていくことが欠かせない。

本年度は、複線型授業の研究を積み重ねてきた成果を踏まえ、学びの起点となる「問い」に焦点を当てる。学びが活動の選択だけで終わらないよう、問いを学びの軸として意識させ、自律した学びの実現を図る。その過程を通して、子どもの自己調整の力を伸ばし、学びの質を高める。

また、副題に「子ども一人ひとりが主語になる授業の構築を目指して」を掲げ、授業観・指導観の転換を進める。研究対象教科は国語科・社会科・理科とする。国語科は低学年分科会と中高学年分科会に分け、低学年では学び方の基盤をつくる学習を重視する。そこで培った基盤を踏まえ、中高学年では複線型授業の中で問いを軸に学びを展開し、主体的な学びへとつなげていく。



烏森小学校 研究構想図

令和7年4月 研究部

今日的な課題

- 学習指導要領の趣旨
主体的・対話的で深い学び
- 令和の日本型学校教育
個別最適な学び・協働的な学び
- GIGAスクール構想
一人一台端末の活用

研究の背景

- 自律した学習者の育成
→自己調整学習
- 主体的・対話的で深い学びの実現
- 令和の日本型学校教育の具現化
*40分授業において実現を目指す。
*子どもが主語となる授業へ指導観の転換

学校・児童の実態

- 平成25年度より40分授業午前5時間制を実施
- 基礎的な学力は概ね身に付いているものの思考力の伸長が課題である。
- 学びに意欲的に向かう姿勢、自分で学びを進める力は向上の傾向にある。

研究主題

『主体的に学び続ける子どもの育成』
～子ども一人ひとりが主語になる授業の構築を目指して～
*令和6年度～令和8年度 文部科学省研究開発学校 指定

目指す児童像

国語科低学年分科会

言葉を手がかりにして、主体的に学ぶことができる児童

国語科中・高学年分科会

本質に向かって課題を追究するために自分の思いや考えを伝え合う児童

社会科分科会

見方・考え方を働かせながら、主体的に問いを追究する児童

理科分科会

事象との出会いから問いを見出し、自ら解決をすすめる児童

研究の視点 「自律した学び手の育成のために - 自己調整力の育成 -」

①子ども一人ひとりが主語になる複線型の授業

今年度も引き続き、国語科、社会科、理科の分科会において授業研究を行う。各教科とも、単元の中に、学習者主体の学びを進める複線型の学習過程を設定する。児童が、学習課題をもち、学習形態や学習方法を自己選択、自己決定する過程を通して、自己調整力を身に付け、自ら学びを進める力を育成する。

②自ら学びを進める力を付ける学習タイム

子どもたちが主体的に学び続けるようにするためには、学習の方法、学び方を身に付けるようにすることが不可欠である。

- ・時間調整力を育てるスケジュール学習
- ・自分に適した学習方法を選ぶ選択学習
- ・探究の過程を通して追究する探究学習

の3種類の学習を学年の発達段階に応じて取り入れることで、自己調整をしながら学習を進める力を付ける。

●複線型の授業と学習タイムの関連を図った実践

複線型の授業で学んだ学習の進め方や方法と学習タイムの探究的な学習の進め方の関連を図り、相互の学びを生かせるようにし、児童が学び方を学び、自身で実践できるようにしていく。児童一人ひとりが、学習課題や学習形態、学習方法を自己選択、自己決定する過程を、複線型の授業及び学習タイムの両方に取り入れ、児童が自らが考え学習を進められるようにしていく。

●ICT・学習用情報端末の活用

学習用情報端末 (iPad) を学習のツールとして児童が自己の学びのために活用できるようにする。また、教師が児童の学習状況を把握し、適時、的確な指導・助言により、個別最適な学びや協働的な学びの充実を図る。

児童が自ら学びを進める複線型の授業や学習タイムにおいて、ICT・学習用情報端末の活用が前提となる。

研究の仮説

学習者主体の授業や探究学習において児童が自己調整をしながら、学び方を学ぶことにより、自ら学習を進めていけるようになるだろう。

研究の内容と方法

授業研究「一人ひとりの子どもを主語にする複線型の授業実践」

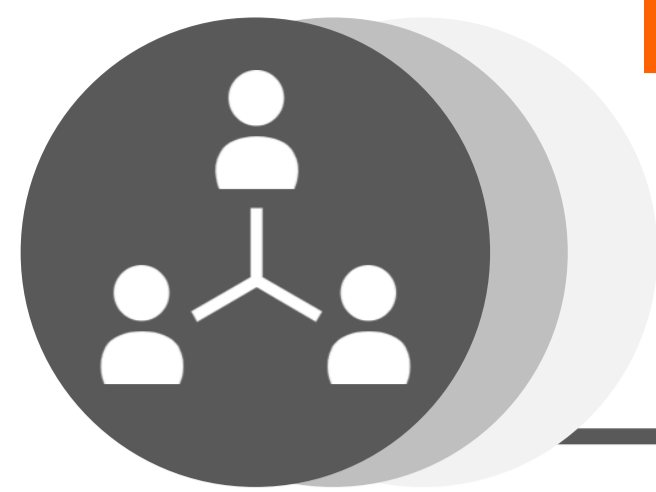
- ・複線型の授業における学習環境の設定 (ICTの活用も含む)
- ・単線型 (一斉指導) と複線型を組み合わせた単元デザイン、授業デザイン
- ・教科や単元の本質に向かう深い学び、個性に応じた資質・能力が伸びる学びにつなげる。

実践研究「自己調整力を付ける学習タイムの実践」

- ・学習のサイクルを自分で回せる力を付ける。低学年においては、探究学習に向けて、スケジュール・選択学習において力を付ける。

調査研究「子どもの学びに向かう意識、学びの変容の可視化」

- ・自己調整学習の要素 (動機付け、学び方、メタ認知) を視点とした児童の学びの変容を捉える。
- ・複線型の授業と探究学習における児童の学びの関連を捉える。



柱 1

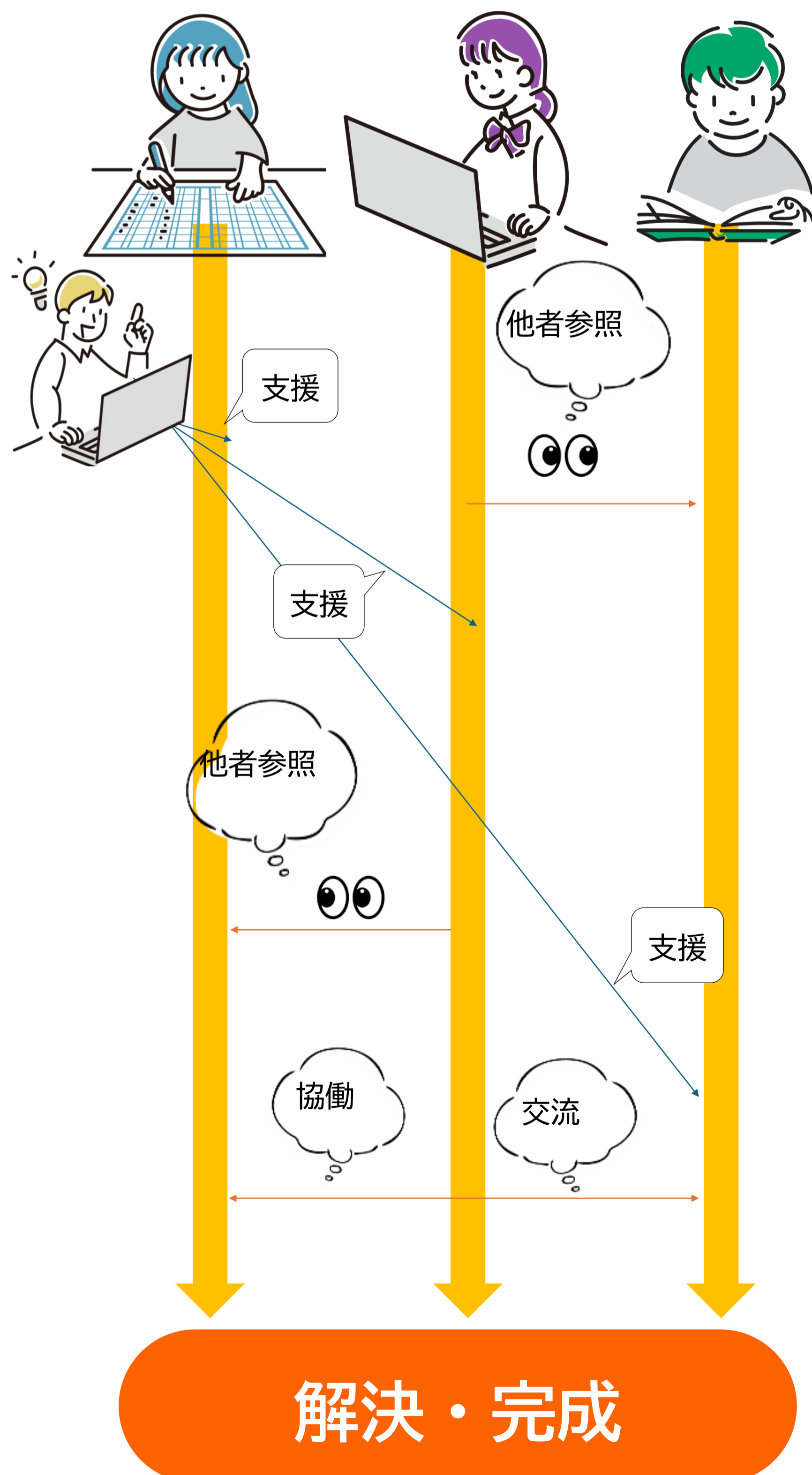
複線型の授業について

●学習者主体の授業の在り方の一つとして、複線型の授業モデルを実践しています。

教科のねらい

課題設定

個別探究



● 複線型の考え方

児童一人ひとりの学びを最大限に引き出し、学習のねらいを達成するために、一斉指導と複線型の学習過程を効果的に組み合わせることを重視している。

● 問いの位置付け

学習の最初に、方向を定める「問い」を設定する。問いは、学級全体で練り上げて共有する場合や、児童一人ひとりが自分の問いをもって追究する場合がある。いずれの場合も、問いを拠り所にして学びを深める。

● 課題設定

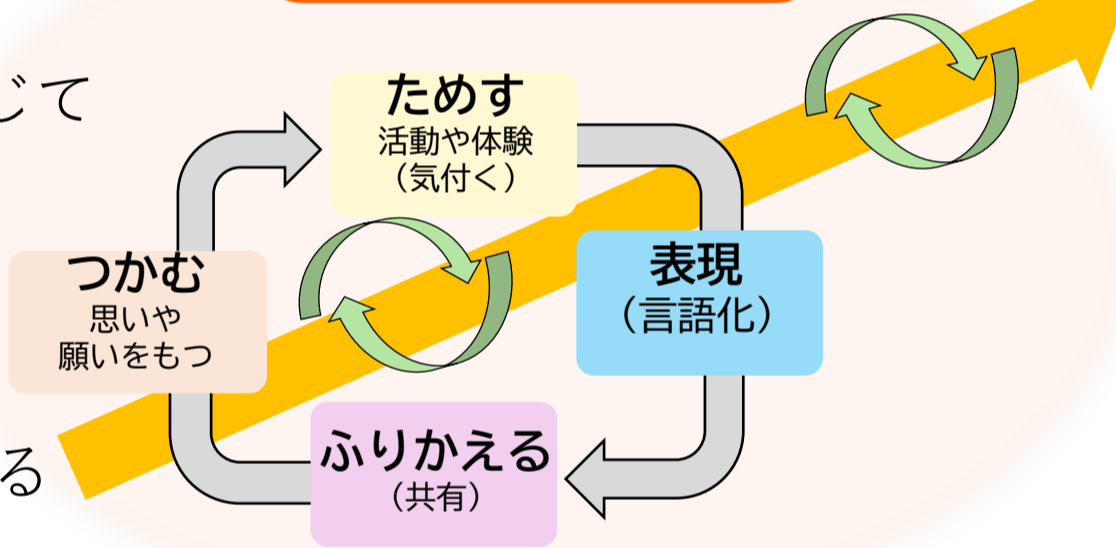
一人ひとりが自分の課題（問い）をもち、課題解決に取り組むことを基本とする。教師はファシリテーターとして、児童とともに問いや課題を整理し、学習の見通しがもてるように支える。

● 学習過程

学習の進め方は発達段階に応じて計画的に指導する。

- ・低学年…教師が示す
- ・中学年…教師と一緒に
- ・高学年…児童が自分で進める

学びのスパイラル



● ICT活用

個別最適な学び

協働的な学び

教師が児童の活動を学学習用情報端末を活用し、習用情報端末で把握し児童が自己の学び方を決一人ひとりの学びに寄り添いながら、自分のペーり添った支援を行う。スで学習を進める。



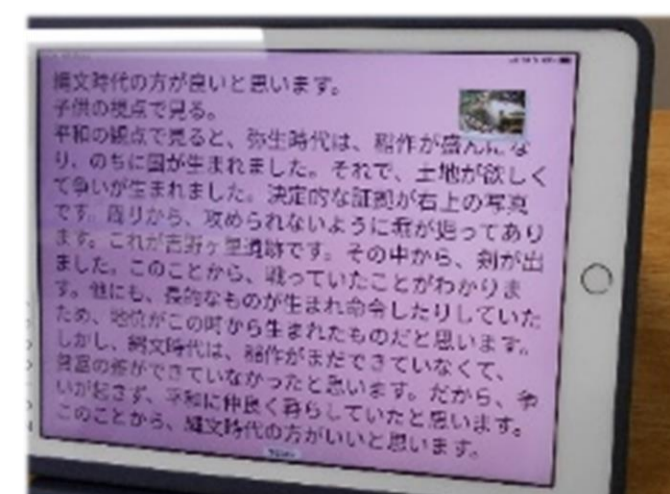
● 学習形態

一人でじっくり考える学び、ペアで確かめ合う学び、グループで検討する学びなど、学習形態を児童が選択できるようにする。形態の選択は、課題を解決するために必要な学び方を自分で判断する。



● 課題提出

課題は一人ひとりが責任をもって提出する。問いに立ち返りながら学習の成果を明確にし、自分の言葉で説明できる形にまとめる。自らの学びを振り返りながら、学習の成果を明確にし、次の学びにつなげる力を養う。





柱 2

学習タイム

●40分授業午前5時間制によって生まれた時間を、学習タイムとして位置付けて実践しています。



選択学習

- ▼①共通課題から自分に合った学び方を選択する。
- ②計画に沿って学習を進める。
- ③学習の振り返りをする。

自学自習の基礎や手段を学ぶ

+

学び方面での自己調整力



スケジュール学習

- ▼①共通課題から課題内容を選択し、学習計画を立てる。
- ②計画に沿って学習を進める。
- ③学習の振り返りをする。
- ④学習成果の確認テストを実施する。

基礎学力の定着

+

スケジュール面での自己調整力



探究学習

- ▼①課題設定（既習内容からの派生）
- ②情報収集（インタビュー、本、インターネット）
- ③整理・分析（表、図、思考ツール）
- ④まとめ（スライド、ノート、ポスター、新聞）
- ⑤説明・発表

自学自習の実践

+

探究段階の自己調整力

例) 3年生の理科で昆虫の学習をしたけれど…他にはどんな虫がいるのかな？
自分の住んでいる場所はどうかな？調べたい！
☞課題「東京にはどんな昆虫が住んでいるのか」

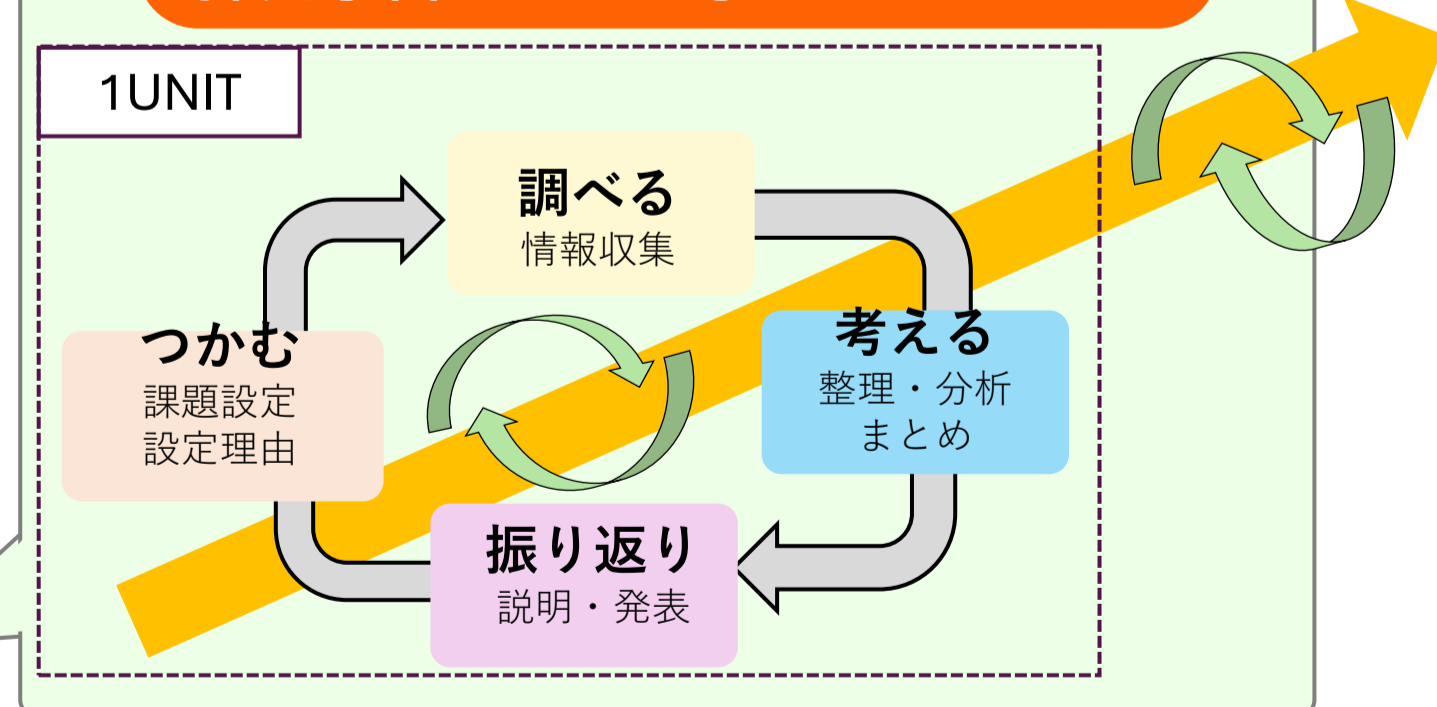


●児童の発達段階を考慮して、3種類の学習を以下のように設定しています。

1年	選択学習 1 UNIT 3～4回
2年	スケジュール学習 1 UNIT 5～6回
3-6年	探究学習 1 UNIT 約20回 × 4UNIT

令和6年度学習タイム実施回数（全74回）

探究学習における学びのスパイラル



UNITについて

各学習の内容を踏まえた上で、1 UNIT（ユニット）の回数を定め、計画から振り返りまでを一連の学習として捉え、次のUNITの学習に生かしていけるようにしています。

探究学習について

複線型の授業のスパイラルと同じ学習過程を進めることで、より児童が見通しをもって取り組めるようにしています。



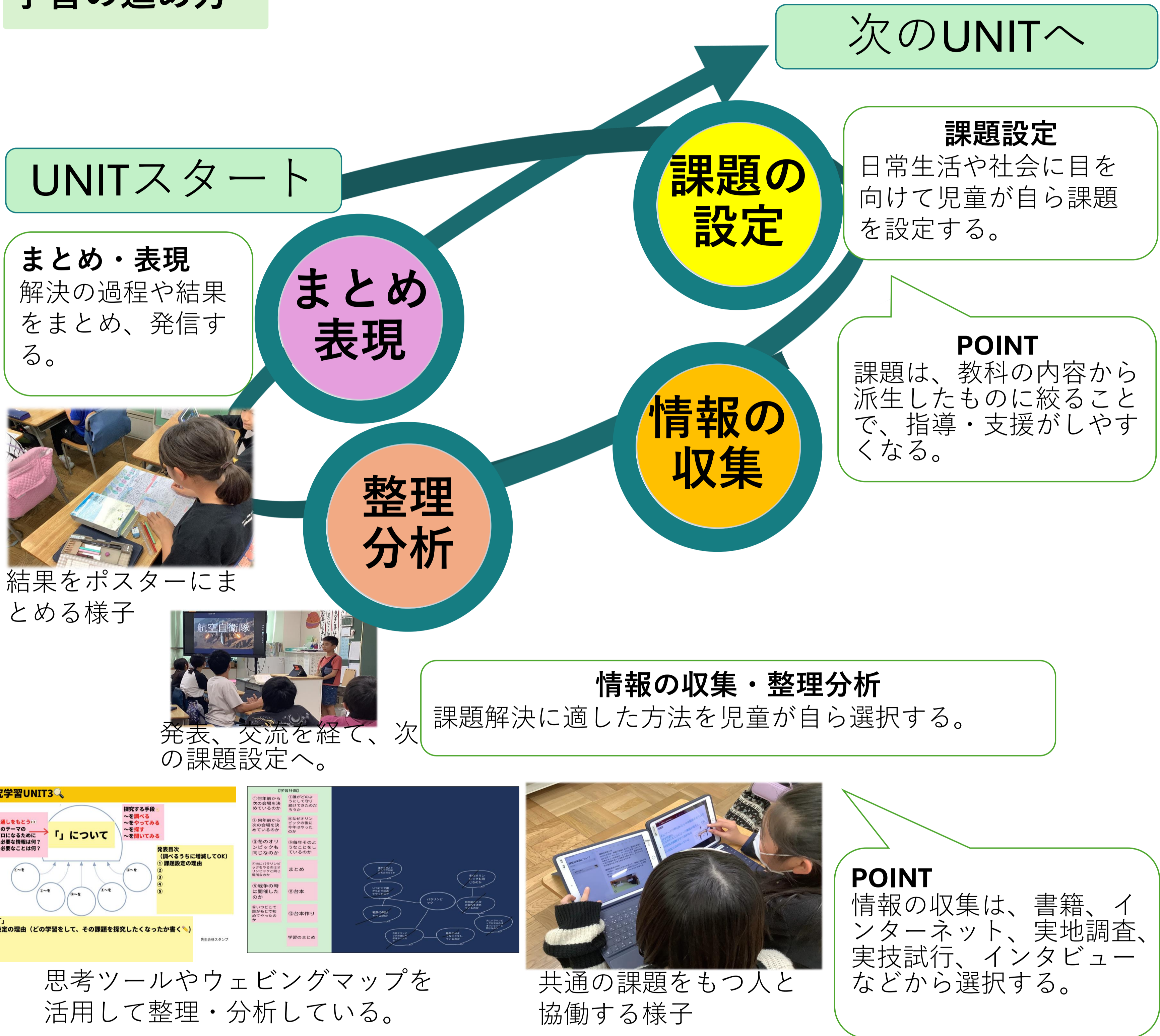
柱 2

学習タイム

探究学習

複線型授業を通して身に付けた「探究の進め方」を使って、興味のあることを追究する学習

学習の進め方



●成果

- ・個人の「調べたい」を基に課題設定することで、探究心をもち続けながら活動できた。
- ・集めた情報をそのまま発表するのではなく、自分で整理・分析する力が高まった。

▲課題

- ・課題の設定について、次の観点できめ細かく指導する必要がある。
 - ① 1 UNITの学習に適した課題であるか。
 - ② 到達目標が明確になっているか。
- ・ 1 UNITの学習の成果を次のUNITにつなげていくための指導をする必要がある。

40分授業午前5時間制で

生み出した時間

5分×1015コマ=5075分

- 「1単位時間40分」で授業を進めることで生み出した時間を、烏森小学校では以下のように活用しています。

■学習タイム 【児童の学びの質の向上】



- 自己調整の力を育成
(火、木 午後の30分間、全学年で実施)

- ・スケジュール学習→時間調整力の育成
- ・選択学習 →自己に適した学び方を選ぶ力の育成
- ・探究学習 →自己の学びを進めていく力の育成



■にこにこタイム【児童の生活の質の向上】



- 1～6年生の異学年交流の時間 (月1回・20分間の実施)

- ・6年生がリーダーとなり、遊びを計画・進行する。
→主体性・リーダー性が高まる。
- ・他学年の児童と、遊びを通じて関わり合う。
→人と関わる力・自己有用感が高まる。



■校内研修の充実【教員の裁量時間の充実】



- 校内研修会
教員の資質能力の向上をねらいとした研修

-研修会テーマ例-

- 「学習用情報端末の効果的な活用」
- 「実技教科研修会」(体づくり運動の実践、読書指導について)

- からすもり塾
若手教員の指導力の向上をねらいとした研修

- ①若手教員が日々の課題や深めたいことについて話し合う。
- ②主任・主幹教諭に講師依頼をし、研修会の場を設定する。
- ③学んだことを「からすもり塾通信」にまとめ、校内全体に周知する。

